

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 12 日現在

機関番号：32614

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23530163

研究課題名(和文)ラザスフェルドとアメリカの社会科学

研究課題名(英文)Paul Lazarsfeld and American Social Sciences

研究代表者

苅田 真司(KARITA, SHINJI)

國學院大學・法学部・教授

研究者番号：30251458

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,000,000円、(間接経費) 300,000円

研究成果の概要(和文)：1940年代から70年代にかけて活躍した、アメリカの社会学者パウル・ラザスフェルドの文献を、社会科学史的観点から研究することにより、以下の三点を明らかにした。(1)ウィーン期のラザスフェルドについて、ドイツの社会調査史との関係を明らかにした。(2)1940年代のコロンビア大学の社会学部における共同研究の実態を明らかにし、方法的には大きく異なるものとして分類される社会学者が、緊密な協同作業を行っていたことを明らかにした。(3)1950年代から60年代にかけての大規模社会調査の制度的な構造を分析し、自然科学とよく似た「大規模な協同的行為としての科学」という現象が見られることを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：Analyzing the works of Paul F. Lazarsfeld, I got three new findings. 1. Before moving to the US, Lazarsfeld was more largely influenced by the social statistics approach in Germany than thought before. This fact give new light to the relation between the American Social Sciences and European positivism. 2. I figured out the reality of the cooperated sociological researches at the Columbia University and found the sociologists, who usually set on the opposite side of methodology, tightly worked together. I also tried to demonstrate the conditions of such a cooperation. 3. I described the features of the large scale social researches performed in 1950s and 60s, and placed them within the context of "Big Science", which is used, in the sociology of science, to describe the natural sciences after World War II.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：政治学・政治学

キーワード：ラザスフェルド アメリカ社会科学

1. 研究開始当初の背景

(1)研究代表者は、2004 年以来、アメリカ社会科学における実証主義的方法論の受容過程と、それがアメリカ社会科学に与えた影響について研究を進めてきた。本研究に先立つ研究では、主として 1930 年代に焦点を当てて、アメリカにおける統計学グループの存在を析出するとともに、その社会科学観が、それ以前のアメリカの社会科学観との対立関係を構成していた点を歴史的に分析・記述した。研究は、この研究の延長上に位置するものである。前研究の対象であった 1930 年代までの統計学グループは、計量経済学に見られるようなマクロ的集計量に対する共時的・時系列的な記述統計学を主要な分析道具としていた。こうしたマクロ的な対象を扱うという点では、統計学グループに対抗した歴史主義的社会科学のグループも同様である。これに対して、1950 年代のアメリカ社会科学における方法論は、むしろミクロ的な対象である具体的な社会行動に対して、心理学的・統計学的方法を導入するところに、その大きな特徴がある。

(2)これまで、広い意味での「実証主義的な方法論」という枠組の中で、こうした違いは等閑視されてきた。しかし、このギャップは、アメリカの社会科学史にとっては重大な意味を持つ。つまり、こうしたミクロ的な対象に対する実証主義的な方法の適用は、アメリカ社会科学の創設期から続いてきた社会科学における科学性と実践性の対立の一種の総合と評価することができるからである。その意味で、こうした異質な要素の導入過程の分析は、1940 年代におけるアメリカ社会科学の転換過程を理解する上で必須の作業である。

(3)この研究では、こうした新たな方法論の転換に当たって大きな力をもった、1930 年代以降ドイツやオーストリアからアメリカに亡命してきた知識人たち、とりわけ、ウィーン学団に発する論理経験主義的な科学的方法論とポスト・ウェーバー期のドイツ社会学の薫陶を受け、アメリカで大きな成功を収めたパウル・ラザスフェルドに着目して、アメリカ社会科学史上におけるその意義を明らかにし、アメリカ社会科学の歴史的展開過程を跡づける試みであった。

2. 研究の目的

(1)先行研究によれば、ラザスフェルドは、認識と実践を峻別するウェーバー以来のドイツ社会学の伝統に抗して、社会学者の果たす実践的な役割を強調する点にその特徴がある一方で、アメリカでは「ヨーロッパ風の実証主義者」と評価された。アメリカにおけるラザスフェルドが持ったこうした特殊な地

位が、アメリカ社会科学における大きな重要性を獲得せしめた要因の 1 つと考えることができる。また、社会科学における組織的な調査という新しい制度的な方法の確立に、ラザスフェルドが大きな役割を果たしたことも夙に指摘されている。この研究では、ラザスフェルドの社会科学方法論や社会科学観に関する先行研究を踏まえつつ、それを 1930 年代までのアメリカの社会科学論の中に位置づけることを目的とする。

(2)また、当時のアメリカ社会科学の状況に参照しつつ、その中で持つラザスフェルドの意味を考察した先行研究は存在するが、狭義の社会学の枠を超えた、アメリカ社会科学における当時の基本的な対立状況の中に十分に位置づけられているとは言い難い。とりわけ実証主義的な方法論は、既に 1930 年代のアメリカにおいても一定の地歩を確立していたのであり、それがラザスフェルド(に代表される「ヨーロッパ型の」実証主義)にとってかわられねばならなかったのか、という点に関しては、十分な説明がなされていない。また、フルステンベルクという社会科学者の「新しい組織化」の動きは、それ以前の社会科学の制度的布置の議論を無視しては成り立ち得ないはずであるが、それに対する十分な考察はなされていない。そこで、本研究では、ラザスフェルドの方法論とその形成過程 - すなわちウィーン時代のラザスフェルド - を序論として踏まえつつ、1930 年代におけるアメリカの社会科学の文脈の中でのラザスフェルドの方法論の持つ意味を、文脈内面的な視点から明らかにしていく。また、ラザスフェルドの方法論が受容されていく過程は、コロンビア大学における統計学グループの解体と、新たな行動論グループの形成過程と重複している。そこで、上述した社会科学の組織化という面からも、社会科学における新しい方法論的グループの台頭過程を検証する。

3. 研究の方法

(1)ラザスフェルドの思想と方法に関しては、ラザスフェルドの著作およびラザスフェルドを対象として含む先行研究文献を対象に方法論的な側面からその分析を行う。

また、アメリカ合衆国での資料収集を行い、コロンビア大学を中心としたラザスフェルド関連文書を閲覧・分析する。

(2)ラザスフェルドの議論の背景となる社会科学史及び社会科学論に関しては、研究代表者のこれまでの研究を受ける形で、アメリカにおける 1940 年代の社会科学論に関する文献の分析を中心に行う。

(3)これらの公刊文献および未公刊資料の分析を踏まえて、主としてウィーン期のラザス

フェルドに関する方法論及び思想の形成過程を分析するとともに、その背景にある社会科学観を解明する。

(4)ラザスフェルドの社会科学観の持つもう一つの側面である社会科学の有用性についての議論を検討する。とりわけ、アメリカにおけるプラグマティズムの影響を受けた改革主義的な社会科学との異同について検討される。

(5)アメリカ移住以後のラザスフェルドの方法論及び思想の受容過程を分析する。前述のフルステンベルクが指摘するように、実証主義と(アメリカ風にいえば)プラグマティズムとの中間的な地点にたつラザスフェルドは、アメリカでは独特の受け止められ方をした。その評価の意味を、同時代的な他の社会科学観との対比の中で明らかにしていく。

(6)ラザスフェルドの狭義の方法論ではなく、研究の組織化と制度化をめぐる議論がアメリカでどのように受容されたかを検討する。特に、1930年代までのアメリカ社会科学の制度化の様式との対比を行うと同時に、それが受容される歴史的な文脈についての分析を行う。

(7)ラザスフェルドの方法論が、後の時代の社会学者たちに与えた影響について、社会科学観および社会科学研究の組織化の面から検討する。単なる方法論史の一コマではなく、アメリカ社会科学史の中に位置づけられたラザスフェルドの影響関係を正確に測定する枠組みを設定することが目標となる。

4. 研究成果

(1)研究の進行

研究は、研究計画に基づいて、進められた。公刊文献の調査を進める過程で、ウィーン時代のラザスフェルド像について、先行研究とは異なる見解の可能性にたどり着いたため、その分析に若干の時間を要した。そのため、コロンビア大学における資料調査に遅れが生じた。資料調査の成果を含めた分析は、順調に進められたが、成果の一部は未発表の状態である。

(2)研究で得られた新たな知見と意義

本研究の結果、以下のような意義を持つ新たな知見が獲得されたと考える(未発表論文中に記述されているものも含む)。

ウィーン期のラザスフェルドに関して、先行研究とは異なり、ウィーン学団の影響よりも、心理学的な社会調査の影響が大きいとわかった。ドイツ語圏における社会調査の歴史に関しては、これまでも先行研究があるが、初期の社会調査とラザスフェルドの方法

論のつながりの重要性について、考察を加えた。その成果は、「ラザスフェルドの社会科学論」に詳述されている。

ラザスフェルドのアメリカでの受容について、サンプリング調査を含む統計学的手法の革新に対して、ラザスフェルドが果たした役割を明らかにするとともに、コロンビア大学における統計学派の展開における役割を明らかにした。その成果は、同じく「ラザスフェルドの社会科学論」および「ビッグサイエンスとしての社会科学」(未発表)に詳述されている。

コロンビア大学の社会学グループにおける協同作業の実態を明らかにし、異質な方法的立場と考えられがちなラザスフェルドとロバート・マートンが一体となった研究を行っていたことを明らかにした。そうした共同研究が可能であった前提条件を、コロンビア社会学の伝統の中で明らかにした。その成果は、「ラザスフェルドの社会科学論」などに詳述されている。

コロンビア大学の応用社会科学研究所における調査形式を具体的に明らかにするとともに、それを「ビッグサイエンス」という科学社会学的概念を用いて分析し、20世紀中葉における社会科学の制度的な転換を、より広い科学社会学的文脈の中で位置づけた。その成果は、「ビッグサイエンスとしての社会科学」(未発表)に詳述されている。

その他、ラザスフェルドの未公開資料の内容について、学問的価値があると思われるものについては、その詳細について分析を行った。また、アメリカにおける社会科学とアメリカ社会全般との関わりについて、多くの社会学者の証言や、さまざまな二次的分析を読解・整理する機会を得た。これらの成果については、本研究課題に直接関係する論文等だけではなく、アメリカ社会科学および社会科学一般に関する分析に重要な知見として生かされている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

1. 苅田真司、「ラザスフェルドの社会科学論」、『國學院法学』、査読無し、第52巻、2014年(7月刊行予定、掲載決定済み)

〔学会発表〕(計1件)

1. 苅田真司、「宗教と公共性 - 政治学の視点から」、『日本宗教学会第71回学術大会 パネル『ポスト世俗社会と公共性』、2012年9月7日、皇學館大学

〔図書〕(計1件)

1. 古沢広祐、荻田真司、他、弘文堂、『共存学2 災害後の人と文化 揺らぐ社会』、2014、259(219-234)

〔その他〕

ホームページ等

「研究成果のページ」(<http://www2.kokuga.kuin.ac.jp/~karita/study.html>)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

荻田 真司 (KARITA, Shinji)

國學院大学・法学部・教授

研究者番号：30251458